

## ある言語学者のエスペラント観について

かどや ひでのり<sup>1</sup>

エスペラント運動をはじめて内部からながめるときに、すぐにきがつくのは、そこにかかわっている職業的言語学者が非常にすくないことである。なぜ言語の「専門家」であるはずのひとびとがエスペラントやエスペラント運動に関心をしめさないのか。あるいはエスペラント運動の（批判ではなく）中傷すらおこなうことがあるのか。本稿ではこの点についてかんがえてみたい。そのてがかりとするのは、くろだりゆーのすけ（黒田龍之助）『にぎやかな外国語の世界』（白水社、2007年、pp.156-7）におけるエスペラントについての記述である。これを選択した理由は、この著者が一般むけの比較的良質な書籍を商業出版している著者であることと<sup>2</sup>、エスペラントについてふれたその内容が、言語学者・言語研究者のあいだにみられる立論の典型例であると筆者が判断したことにある。本稿ではその議論がもつ特徴の析出をこころみ、なぜそのような議論がなされるのか、その背景をかんがえる。こうした作業は、エスペラント運動の障害ともなりうる言説がうみだされる構造を把握し、その対抗言説を構想するための基礎となるだろう。まず、当該の記述をしめす（下線は引用者による）。

### 国際共通語という夢

「エスペラント」というのを、聞いたことがありますか。

エスペラントはポーランドの眼科医であるザメンホフという人が1887年に発表した<sup>a</sup>人工言語です。人工言語というと、なんだかコンピュータみたいな気がしますが、そうではなく、人間の言語とおなじ発想で創られた、国際共通語なのです。ちなみにエスペラントというのは、「希望する人」という意味<sup>b</sup>だそうです。

国際共通語を目指して作られた人工言語は、エスペラントだけではありません。他にもヴォラピュクとかイドなど、いろいろとあるのですが、その中でもいちばん成功している、つまり、普及しているのがエスペラントです。

エスペラントのような人工言語の利点は、<sup>c</sup>誰にとっても平等であることだといわれています。人工言語が母語という人はいないわけですから、<sup>e</sup>誰もが勉強してこれを使うという条件は同じだからです。たとえば英語が国際共通語として使われるようになると、英語を母語とする人がどうしても有利になってしまいますが、そういう不公平がありません。

みんなに平等なエスペラントは、<sup>d</sup>国際的な場面でのコミュニケーションに役立つことを目指しています。そのため、エスペラントの普及活動が世界中でおこなわれています。

またエスペラントは、みんなが覚えやすいようにやさしく創られています。文法の基本規則はたった16で、しかも例外が一切ありません。文字もラテン文字だし、勉強するのがとても楽だといわれています。

でも、わたし個人としては、残念ながらエスペラントにあまり興味が持てません。

まず、やさしいといわれていますが、あまりそういう気がしないのです。語彙はヨーロッパの諸言語が基本です。たとえば数字「1、2、3」はエスペラントで「ウヌ、ドウ、トゥリ」といい、スペイン語やイタリア語によく似ています。他の語彙もそうで、英語やフランス語などをすでに知ってい

<sup>1</sup>kadoya@tsuyama-ct.ac.jp

<sup>2</sup>ほかに『羊皮紙に眠る文字たち—スラヴ言語文化入門』現代書館、1998年、『はじめての言語学』講談社現代新書、2004年など。スラヴ諸語に関するものや啓蒙的言語学関連書を継続的に出版している。

る人にはいいかもしれませんが、そうでなければ、覚える手間は同じではないでしょうか。それに、これはわたしが素直でないからかもしれませんが、例外がない文法なんて、なんだかつまらないのです。

みんな平等にという発想は立派です。でも、国際共通語1つだけでみんながコミュニケーションできる世の中は、果たして幸せなんでしょうか。すくなくとも、にぎやかな外国語の世界を目指すわたしにとっては、英語だろうとエスペラントだろうと、たった1つの言語の世界はやっぱりつまらないのです。

エスペラントの普及を目指している人は、立派な目的をもってやっているのだから、それを否定するつもりはありません。世の中にはいろいろな考え方がありますからね。つまらないというのは、あくまでわたしの個人的な意見です。

この記述からわかることをみていこう。まず、くろだ氏は下線bをはじめとする伝聞表現にみられるように、エスペラントの学習・運用経験をもたず、実際に使用されている言語としてのエスペラントに無知であるとおもわれる。ただし、エスペラントについて紹介的にのべている内容にあやまりはなく、下線c、c、dにあるように、エスペラント運動において主張されていることも適切に把握している。そうした紹介のあとで、氏は「興味をもてない」とのべ、その「根拠」をあげている。ひとつは「やさしい」といわれているがそうではないのではないか、ということである。氏のような「知識人」がエスペラントにふれるとき、第一に目をむけるのは、みずからが相応の知識をもつ、ヨーロッパの優勢諸言語との類似、とくに語彙の類似である。そのため、いってみればエスペラントの「外観」を一瞥しただけで、それらとの類似性をよみとって、エスペラントの特徴を「理解したつもり」になってしまう。エスペラントの主要語彙の語源になったとおもわれる言語がかたよっていることは事実である。しかし、そのことはエスペラントの主要な特徴について理解するための手がかりになるようなことではない。知識が目をもらせ、そのことに気がつかないのである。エスペラントには特権的な母語話者がおらず(単なる母語話者ならいる)、また合理的な造語法によって、学習コストがきわめてひくくなっている。そして、その特徴こそが平等なコミュニケーションを可能にしている<sup>3</sup>。こうした面がエスペラントの最大の特徴といえようが、これは語源とは無関係なことである。下線eはあきらかなあやまりといつてよい。エスペラント学習でも基本語彙の暗記は必須であるが、エスペラントが西欧諸語などとことなるのは、その数が極度にすくないこと、基本語彙からの規則的造語によってえられる語彙が膨大であることにある。そうした根本的な相違点を無視して、基本語彙学習の必要性だけに注目し「手間は同じ」とするのは、詐欺的である(単なる無知によるのなら、氏は「知らないことについて論じる」という、アカデミックな誠実性を欠いた無謀さをみせていることになる)。

ついで、氏は、下線c「誰もが勉強してこれを使うという条件は同じ」、下線c「誰にとっても平等であること」という特性によって、下線d「国際的な場面でのコミュニケーションに役立つことを目指しています」と、エスペラントの目的を把握しながら、下線h「英語だろうとエスペラントだろうと、たった1つの言語の世界はやっぱりつまらない」と結論している。もし「国際的な場面でのコミュニケーション」がさまざまな言語でおこなわれたほうがのぞましいのであれば、氏のような多言語話者のように、さまざまな言語を習得できないひとびとは、「国際的な場面でのコミュニケーション」には参加できなくなるだろう。そうしたみずからの主張の意味することに気がつい

<sup>3</sup>拙稿「言語権から計画言語へ」ましこひでのり編『ことば／権力／差別 言語権からみた情報弱者の解放』三元社、2006年、pp.107-130に詳しい。

ていないとおもわれる。「なんだかつまらな」くはない世界が、言語弱者にとって意味することに目がむかず、エスペラントによる国際的な場面でのコミュニケーションを否定するのは、言語的・社会的強者である氏が**自分自身の権力・利益の源泉を無意識のうちに擁護しようとしている**ためと判断せざるをえないだろう。エスペラントは、異言語使用者間のはしわたし言語として機能することを目的としているから、下線 h 「たった1つの言語の世界」をめざしているわけではない。異言語話者がまじわらない場面では、基本的にエスペラントの幕はないから、エスペラントが世界的に採用されたとしても言語的多様性がそこなわれることはかんがえられない。氏はそのことを認識しているようであるのに、「たった1つの言語の世界はつまらない」と結論づけているのである。下線 g 「国際共通語1つだけでみんながコミュニケーションできる世の中は、果たして幸せなんでしょうか」という疑問をもつなら、「異言語・多言語を習得できる能力・学習資源をもつひとだけが国際的にコミュニケーションできる世の中は、果たして幸せなんでしょうか」という疑問についてもかんがえなければ筋がとおらない。このように、くろだ氏の議論は、何重にも破綻している。しかもこの破綻を下線 h 「世の中にはいろいろな考え方があります」、下線 i 「あくまでわたしの個人的な意見」とのべることで相対化し、おおいかくそうとすらしているのである。

まっとうな研究者らしい言語論をおおく展開しているくろだ氏のような人物が、なぜこうした支離滅裂な議論におちいり、しかもそれを隠蔽するような言辞まで弄してしまうのだろうか。氏はエスペラントを下線 a 「人工語」だとしているが、ここにひとつの鍵があるとおもわれる。つまり、一般的な言語（非計画言語・民族語）が「非人工＝自然言語」と位置づけられているのである。これは科学的にはあやまりといえる。すべての言語は人間・社会からあまたの干渉をうけ、きわめて社会的なものとして存在している。下線 f 「例外がない文法」にしても「例外だらけの言語」にしても、ともに人間がそれをうけいれ、そのようなものとしてその言語を維持しつづけているのである。すべての言語は社会的・人工的なものである。こうした社会言語学的な視点をかいた言語研究者は、「人工」語／「自然」語のあいだに線をひき、その一方に学習・研究の価値がないという偏見をもってしまっている<sup>4</sup>。エスペラントについて支離滅裂な「評価」をなさしめているものの実体は、この偏見、心情的な負の感覚以外にないであろう。「人間の言語とおなじ発想で創られた」というくろだ氏のことばには「エスペラントは人間のことばではない」という偏見がすけてみえるが、エスペラントは現実に音声・文字による人間のコミュニケーションを可能にしているのである。

また言語学者におおい言語愛好者たちは、言語の複雑さに関心をよせ、言語学習にむかうのが一般的である（そうした嗜癖がなければ、古典語や複数言語の習得、その職業的研究はむずかしいだろう）。そのとき、言語学習それ自体が自己目的化されてしまうという問題がおこる。学習自体が目的となり、学習ののちにおこなわれるであろうコミュニケーションの成立に関心がはらわれなくなるのである。学習自体を目的とすることにはなんら問題はない。しかし、その結果、「コミュニケーションのための言語学習」についておもしろいと思わなくなることが問題なのである。言語学習は、それ自体を目的としておこなわれるばかりではなく、必要にせまられ、生きるためにしかたなく、強制されて、といった理由でもなされる。その場合には、コミュニケーションをとることが目的となるが、嗜好充足のための学習だけを念頭においている人にとっては、そのような学習のありかたや「コミュニケーションの成立」が社会的にもつ意味が、完全に視野の外におかれる。そのため、「なんだかつまらな」という、まさに**個人的な嗜癖上の理由によって、エスペラントに否定的評価を**

<sup>4</sup>筆者個人は、ゲルマン語研究者、古英語研究者のふたりから、別個に「エスペラントは人工語だから」（関心・価値がない、学習しない）と言明されたことがある。

**くだす行為**をとってしまうのである。その結果、エスペラントの社会的意義、エスペラントが言語権保障に貢献できることの意味が理解できなくなっている。異言語を習得できるだけの能力・学習資源をもたないひとびとがコミュニケーションから疎外されるということになんら痛痒をかんじない心性、そうしたひとびとがひろく存在することにおもしいたる想像力の欠如、すなわち人権（言語権・コミュニケーション権）への無関心がそこにはある。

くろだ氏のエスペラントに関する記述は、社会言語学的な関心の徹底的な欠如が言語学者の病根としてあることをしめしているとかんがえられよう。この点に焦点をあてた批判をつむぎだしていくこと、くろだ氏の言説のような議論を継続的に検証していくことは、エスペラント運動の重要な課題である。